

第5章 がけっぶち

いつものように、のぼるは、教室にギリギリに着いた。だいたいクラスメイトは、朝読書の準備を始めている。のぼるの学校は、毎朝、朝の会が始まる前に、読書の時間が10分ある。実は、のぼるはこの時間が結構気に入っていた。本を読むことは、あまり苦にならなかった。本を読みながら、あれこれ、想像するのが好きだったのだ。

今日は何を読もうかな？と、のぼるは、つくえの中を、がさごそ、さがしてみた。のぼるのつくえの中は、今までもらったプリントやら、しんが折れたえんぴつやら、いつ描いたかも覚えてない絵やら、ごちゃごちゃ入っている。全くのぼるが整理しないからだ。なにかをもらったり、配布されたり、使い終わったら、すべて、つくえの中に入れていた。だから、つくえの中は、どろぼうに入られた家のように、ぐっちゃぐちゃだった。

「のぼるくん、少し片付けが必要そうなたくえの中ね。」

ミシャが言った。

先生にも、授業参観に来たあとのお母さんにも、となりの子にも、みんなに言われるよ。でも、めんどくさいじゃん。

「でも、なにが入っているかわからないでしょ？」

ううん。わかる。片付けてしまったら、余計にわからなくなると思う。

「今日は、学校集会があるみたいだけれど、そのプリントはどこにある？」

ミシャは、黒板の今日の予定を見ながら、聞いた。

え〜と。たしか、この辺に。と、こころの中で、ぶつぶつ唱えながら、のぼるは、プリントを探した。ほとんどのプリントは、ぐしゃぐしゃになっていて、ひとめ見ただけでは、なにのプリントかわからず、丸まってしまっているプリントを、一つずつのぼしながら、のぼるは探した。

「のぼるくん、もうそろそろ読書の時間が始まるし、そのプリント探しは、やめていいよ。でも、わたしが言いたかったことは、伝わっているよね？」

のぼるは、しぶしぶ、うん、とうなずいた。

片付けか。のぼるは、片付けがとても苦手だ。それは、必要のないものまで、取っ払い、捨てることもできず、物がたくさんたまっていき、そして、それをどう整理すればいいのか、まったくわからないからだった。

「のぼるくん、片付けのコツは、はじめから、ぜんぶやろうとしないこと。まずは、おおざっぱに始めること。たとえば、「いるもの」「いないもの」「どっちかわからないもの」3つに分けて、箱の中に入れていくところから始めればいいのか。小さく、細かく分けると、

とりだしたあとに、もともどすのが大変になってしまうから、おおざっぱに大きく分けるの。」

なるほど・・・

でも、今、読書の時間だからやらないほうがいいよね？

「もちろん、そうね。

あとで、時間があるときに、やってみましょう。

箱も用意しないとイケないからね。」

とりあえず、のぼるは一番に見つかった本を読み始めた。すぐに、のぼるは、その本のストーリーにむちゅうになった。その本の主人公は、とてもかっこよくて、頭もよくて、みんなからしたわれている。そんな主人公が、ヒーローのように、みんなを助ける話だ。

こんな主人公になれたらな。

のぼるは、この本を読むたびに、ひそかに、そう思っていた。

でも、現実では、のぼるは、まわりと比べても、体は小さいし、勉強はまったくできないし、ましてや、ともだちもいない。

のぼるは、自分のことを考えたら、くらい気持ちになった。

「のぼるくん、本に夢中になったり、主人公にあこがれたりすることは、すばらしいことだと思うけれど、自分とくらべなくていいのよ。それは、本の登場人物だけではなく、だれかと比べることはしなくていいの。だって、のぼるくんには、のぼるくんのすばらしさが、かならずあるのだから。」

え～～。なにもないよ。ぼく、自分のことキライだし、いいところなんて、一つもないよ。

「これから、自分で少しずついいところ、がんばっているところ、ほめてあげられるように、練習してみましようね。」

なにもないけどな。

「のぼるくんが、気がついていないだけよ。」

そうかな。

「自分のいいところ、がんばっているところ、って聞くと、なにかすごく大きなことを成しとげたときだけだと思っていない？」

うん。なにか大きなことをしたときだけな気がする。

「ちがうのよ。日々、生活している中で、みんなそうだけれど、がんばっていることって、たくさんあるの。でも、それは、毎日当たり前のようになっているから、日常化していることが多くて、気がつきにくいときが多いのよ。そして、やらなきゃいけないことを、自分の中で、ハードルを高く上げすぎて、もうそのハードルが見えないところまで上げてしまっている人もいるのよ。ハードルを高く上げすぎると、それをこえるのが、むずかしくなっていく

わね。そうすると、ハードルをこえられない自分を責めるの。なんて、わたしってダメなんだろう、って。」

ハードルか。ぼくのハードルも高いのかな。

ところで、ミシャ、日常化ってどういうこと？

「たとえば、のぼるくんが、もっと小さかったとき、はじめて一人で歯をみがけたときのことを覚えている？」

さすがに覚えてないよ。のぼるは笑った。

「そうか。でも、そのときは、きっと、のぼるくん、はじめてやりとげたから、きっと、自分のことほらしげに感じて、やった！って、思った、と思うわよ。でも、毎日毎日、歯をみがくにつれて、それが日常となり、もうほらしげに思ったりすることはないかもしれないわね。」

うん。歯をみがくたびに、自分ってすごい！、って思わないよ。

「そう、だから、できることって、だんだん、慣れてくると、日常にまぎれてしまって、気がつかないのよ。たとえば、学校へ毎日来て、みんなにあいさつすることも、それは、がんばったことなのよ。」

そうなの？

「そう、とくにのぼるくんは、あいさつするのが苦手、というか、はずかしかったり、ちょっと攻撃的になることがあるわね。だからこそ、笑顔であいさつしたら、それは、その一日の中でがんばったことの一つじゃない？」

でも、そんなのみんなやっているじゃないか。

「まわりと比べなくていいの。自分の中で、苦手なこと、ちょっと抵抗があること、それは、みんなちがうものだから。でも、ちょっといやだな、と書いていても、それでもやってみる、というのは、がんばったことなのよ。」

でも、そのがんばったことは、日常にまぎれてしまっているから、はじめは、がんばったことに注目するところから始めるのがいいのよ。毎日、寝るまえに、今日一日がんばったことをさがしてみる、っていうのはどう？そうしたら、きっと、自分のハードルが、ちょっとがんばれば、こえられるぐらいの高さになるわよ。そして、ハードルをこえていくたびに、自分がちょっとずつ好きになっていくと思う。」

そうか。少しでもやってみたら、それはがんばったことなんだ。うん。今日、寝る前にやってみるよ。

「いいね。そうやって、すなおに思う気持ちも、のぼるくんのいいところだね。」

のぼるは、またすこしはずかしくなった。

読書の時間が終わり、のぼるは、少しうれしいような、ほっとしたような、はずかしいような、いろんな気持ちになっていた。

ふと、横を見ると、のぼるのとなりの席のなおちゃんが、すこし気味わるそうに、のぼるの顔を見ていることに気がついた。読書のあいだ、のぼるは、こころの中でミシャと話しをしていたが、のぼるの気持ちのうごきは、顔にでていたのだ。だから、おどろいた顔、うれしそうな顔、わらっている顔など、一人でいろんな顔をしていたのだ。

「この本、おもしろいんだよ。」

と、のぼるは、なおちゃんに説明した。すこし、なおちゃんは、なっとくしたようだった。

ほっ。よかった。顔の表情までは気がつかなかった。少し気を付けないと。

「ふふ。でも、自分の気持ちに正直でいて、それが顔にでることは、すばらしいことよ。でも、一人で、にこにこしたり、おどろいたり、赤くなったり、百面相みたいになるのは、はずかしく感じるかもしれないね。」

うん。

ミシャは、ぼくの気持ちをよくわかってくれるんだな。と、のぼるは、ふと思った。

ミシャが、横で、にこにこ、ほほえんでいる。

今日ののぼるの一日は、2時間目のおわりまでは、順調だった。あいかわらず、先生の言っていることはよくわからなかったけれど、なにごともしなかった。それが、のぼるの「順調」なのだ。

でも、2時間目の算数がおわったとき、教室のかたすみから、どよめきが聞こえた。

「すげー。」

「どうやって手に入れたんだよ？」

「やっぱ、かっこいいなー。」

5, 6人の男子ばかりが、教室のかたすみでむらがり、とても興奮した様子だ。

その中心に、「きりぎりす」がいる。かれは、よくみんなの注目をあびていた。それは、勉強ができるわけでも、スポーツで1位をとることが多いわけでもない。そのときに流行っているものを、そしてレア度が高いものを、よく持っているからだ。彼のお父さんは、どこかの社長らしい。お金もあるし、どこで手に入れられるのかもよく知っていた。きりぎりす、というあだ名は、かれの細長い体と手足が長いことが由来だと、きりぎりす本人は思っている。しかし、もう一つ由来があり、かれ自身が苦勞していなく、気楽そうに生活しているように見えるところが、イソップ物語の「キリギリス」に似ているのだ。

みんな、なにを見ているんだろう？

のぼるは、みんながさわいでいる方を見た。

「あっ！」

それは、のぼるがずっとほしかった、レアもののカードだった。レアの中でも、とてもレアで、まったく手にはいないものだ。のぼるは、おこずかいが入るたびに、そのカードを何枚も、何十枚も買っていた。でも、まだ手にはいっていなかった。そのカードを持っていると、効果がでて、勝つのがラクになるだけではなく、圧倒的な差で、勝てるようになるのだ。

のぼるは、考えるよりも早く、きりぎりすのところへ行き、彼が持っていたカードをすばやく、取った。

「何するんだよ？」

きりぎりすが、めずらしく怒っている。今までも、のぼるは、きりぎりすが持っているレアものを取ってきたが、あまり怒ってこなかった。

「いいじゃん。オレも、このカードほしかったんだよ。」

のぼるは、そう言って、そのカードをじっくり見てみた。あれだけほしかったカードが、今、のぼるの手の中にある。のぼるは、うれしくてしょうがなかった。

「返せよ！」

きりぎりすは、とつぜん、のぼるの手から、カードをとりあげようとした。のぼるは、カードをじっと見ていたので、その行動に気がつかなかった。

カードは、きりぎりすに取り返され、のぼるは、あたまに血がのぼった。からだ中を、なんだかわからないものがかけめぐり、熱くなってきた。

「いいじゃん。おまえは、いろんなカード持っているんだろ？それぐらい、おれにくれよ！」

のぼるは、またそのカードを取り返そうとしたが、きりぎりすがひよい、とそれをかわした。

「これは、あげない。これは、ぼくのだ！」

それを聞いたのぼるは、さらにはからだ中が熱くなり、あたまが真っ白になった。

「いいだろ！」と、のぼるは、きりぎりすに体当たりしようと、突進した。

きりぎりすが、それをまともに受けて、うしろにひっくり返った。でも、カードは、手にしっかりとにぎりしめている。

のぼるが、きりぎりすにまたがり、そのカードを力づくで、ひったくろうとしたとき、

「こらあ！なにやっている？」

大きな太い声が、教室中にひびきわたった。

教室のさうどうの様子を見ていた女の子たちが、担任をよんだのだ。

担任は、その大きなうでで、2人をひきなはし、のぼるは、学年主任に後ろから、うでをつかまれた。

「なにをやったんだ、また、お前は？」

のぼるは、その声を聞いて、全身の力がぬけるのがわかった。今度は、今までと反対に、

血がすうっと、ひいていくのを感じた。

やばっ。またやってしまった。

のぼるは、学年主任にかかえられるように、ある部屋につれていかれた。

この部屋は、のぼるが問題を起こしたときに、かならず連れてこられる部屋だ。とても小さくて、息がつまる。

目の前に、学年主任がいる。担任もこわいが、この学年主任もこわくてしょうがなかった。担任がライオンなら、学年主任は、サイだ。

のぼるは、ずっと下を向いていた。

どうしよう、どうしよう、またお父さんとお母さんがよばれる、それしか、のぼるの頭の中にはなかった。

サイは、ずっとこちらをにらんでいる。そして、なにかずっと、言っている。

のぼるは、全くそれが頭に入ってこなかった。

「じゃあ、今日の放課後、お母さんに来てもらうからな。それまで、学校にいろよ。」

学年主任の、その言葉で、はっと、のぼるは頭を上げた。

「わかったな。のぼる。」

学年主任はそう言って、その部屋から出て行った。

学年主任がお母さんを学校によびだすんだ。そうしたら、お母さんは、またぼくのことでもたくさん注意される。家に帰ったら、お母さんから、またたくさん怒られる。そして、お母さんは、今日のことをお父さんに言うにちがいない。お父さんは、またきつと、それでよっぽうにちがいない。お父さんは、毎日、お酒をのんでいる。でも、なにかがあると、そのお酒の量がふえるのだ。お父さんがよっぽうになったら、めんどうなことになるぞ。

のぼるは、そこまで簡単に想像できた。よくあることだからだ。

そうだ、ここから逃げ出してしまおう。そうしたら、だれにも怒られないし、お母さんにも会わなくてすむし、お父さんともめんどうなことにならないし。

のぼるは、こっそりと、この小さな部屋からにげだし、学校からでていくことに決めた。

そのとき、次の授業が始まるチャイムがなった。

よし、これで、みんな教室に入ったから、ぼくがでていくのを見ている人はいなくなるぞ。

のぼるは、ろうかにだれもいないことを見てから、こっそりと、部屋からでた。げた箱までは、けっこうすぐだ。ろうかを曲がる前に、一回一回だれもいないことを見ながら、しんちょうに、のぼるはろうかを歩いた。少しずつ、ドキドキしてきた。変な汗もかいてきた。

それでも、のぼるは、げた箱を目指して、しずかに歩いた。

は一、やっと、げた箱だ。

そ〜っと、自分のクツを取り出し、うわぐつを、げた箱の中に入れた。

よし、あともう少しだ。

げた箱から出ようとして、はっと、のぼるは気がついた。

しまった。体育の授業で、運動場を使っている！ここから学校の外にでるには、運動場を通らなければならない。

しょうがない・・・

ちがう道で行こう。

のぼるは、自分のクツを手にもち、自分のげた箱から、反対側にある上級生たちが使っているげた箱の方へ移動することにした。そこからなら、正門ではなく、うしろの小さな門から、学校をでることができる。

また、さきほどと同じように、そろそろと歩き、曲がる前に人がいないか確認し、きょろきょろしながら歩いた。

上級生のげた箱までは、いつもはひょいひょいっと行けるのに、今日は、とっても長く感じた。先生たちに会わないように、生徒たちに会わないように、事務の人やそうじのおじさんに会わないように、足音をたてないように、走りたいのをがまんして、のぼるはゆっくり歩いた。

そして、無事に、だれにも会うことなく、上級生用のげた箱に着いた。

やった。ここまで来たら、大丈夫だぞ。

のぼるは、いそいで、クツをはき、校舎から出た。

いちもくさんに、裏の門をめざして、かけていった。

あと、もう少しだ。

そればかり考えて、うでと足を必死にうごかし、運動会の時よりも、しんけんに、のぼるは走った。

着いた！

裏門に着いたのぼるは、そーっと門をあけ、そーっと外へでて、そーっと門を閉めた。

やった！学校の外にでたぞ！

あとは、知らない顔して、平気な顔して、歩いていれば、だいじょうぶだ。

のぼるは、さっき、門まで走ったことで、すこし、息がきれていたが、とにかく少しでも

はやく学校からとおくはなれるために、休まないで、歩きつづけることにした。

ポケットに手をいれて、のぼるは歩きはじめた。

どちらに行こう、と考えることもなく、ただ、足がかってに動いている感覚だった。とにかく、学校も家もおいところだ。

5分ぐらい歩いたところで、のぼるは、自分がお金を持っていないことに気がついた。

あっ。ランドセルもバッグも、ぜんぶ学校だ！

何かがあったときのために、お母さんは千円札を渡してくれていたが、それも学校へおいできてしまった。ランドセルの奥にいれていたのだ。

しょうがないか・・・

のぼるは、自分の足がいたくなるまで、とにかく歩くことにした。なんだか、すこし寒いけれど、ジャケットも学校へおいってきたのだから、しょうがない。

のぼるは、下を見ながら、とぼとぼ歩き続けた。

「どうしたんだい？」

のぼるは、その声を聞いて、顔をあげた。

やさしそうなおばあちゃんが、こちらを見ている。

「なんか、下を向いて歩いているから、具合でも悪いのかい？学校は？」

「あ、いえ。学校は今日は休みなんです。大丈夫です。」

のぼるは、とっさにウソをつき、その場からかけだした。

少し走ったあとに、うしろを見たら、そのおばあちゃんは、もういなかった。

よかった。あぶなかったな。見つかったら、学校へもどされちゃう。

のぼるは、今度は、顔をあげて、堂々と歩くことにした。

こっちのほうへ行くと、海の方にでるな。

のぼるが住んでいる町には、海も山もある。山はあまり大きくないが、のぼるはこの山がけっこうお気に入りだった。海も好きだったが、波がたかいので、夏でも泳げないのだ。泳げない海なんて、行ってもあまり意味はないと思っていた。

でも、今日は、その海に行こう、と思った。今は、海に行くには寒い時期だし、あまり人もいない。あそこなら、見つからないかも、とのぼるは思いついた。

昼間って言っても、あんまり人はいないんだな。

のぼるはそんなことを考えながら、海をめざして、歩きつづけた。ひさしぶりに、たくさん歩いているので、すこし足も痛い。

でも、あと、もう少しだ。海なら、見つからないし、大丈夫。

自分をすこしはげましながら、歩いた。

だから、海が見えたときは、のぼるは、ほっとした。

は一、着いた。

海には、防波堤があり、ブロックがたくさん積んである。その一つに、のぼるは座った。

あー、つかれた！！

海に着いた安心感と、いままで走ったり、歩きつづけたつかれで、のぼるは、うとうとはじめた。

「のぼるくん！のぼるくん！」

だれかがぼくを呼んでいる。

のぼるは、あまりはっきりしない自分のあたまで、だれの声か、いっしょうけんめい考えた。

なんで、ぼくをよんでいるんだろう？

「のぼるくん！のぼるくん！」

はっと、した。

あ、ミシヤ！

「のぼるくん、やっと気がついてくれた。ずっと、よんでいたのよ。」

え？そうなの？全然きこえなかった。

「学校から脱出することに、頭がいっぱいだったものね。」

その言葉で、今、のぼるがどこにいるのか、思い出した。目の前には、海がある。今日はすこし風が強いので、波も高い。浜辺には、たくさんブロックが見えた。

自分のおしりが少しいたい。固いブロックでうたたねしていたからだ。

いててて。

「やっと、頭もこころも起きてきたみたい。」

こころが起きる？ぼくのこころは寝たりしないよ。

「学校から脱出しようと考えていたとき、わたしのすがたや声は感じた？」

ううん。

「一つのことにとりすぎで、まわりの状況が見えていなかったりすると、こころは寝ているかもしれないわね。」

それにしても、学校からでていくのに、かなり一生けんめいだったわね。」

そうか、ミシャは、近くにいって、すべてを見て、ぼくが考えていたこともすべてわかっているんだ。とにかく、怒られたくない気持ちがいっぱいすぎて、ミシャのことをすっかり忘れていた。

「のぼるくん、もう学校もそろそろ終わる時間よ。」

そういわれてみれば、景色がさっきより、うすぐらくなっている。

「はっくしょん。」

「のぼるくん、寒いんじゃないの？」

うん。とつぜん、寒くなってきた。

「おうちへ帰りましょう。」

やだ！こんなところまで来ちゃったし、帰ったら、怒られるだけだもん。

「学校でクラスメイトとケンカしたこと、そこから抜け出してしまったことは、もう変えられないわ。でも、学校もお母さんもお父さんも、のぼるくんがいなくなって、心配していると思うわよ。」

心配なんかしてないよ。みんな、ぼくのことキライだもん。

「どうして、みんなのぼるくんのことキライだと思うの？」

だって、いつも怒られてばかりだし、ほめられたことないし、ぼくがやってないことでも、やった、ってぼくのせいにしてくるし。だから、みんなぼくのことキライなんだよ。心配なんかしてないよ。

「大人から怒られたことを、たくさん覚えているのね。怒られるたびに、のぼるくんの中で、怒りやくやしさが、たまっているんでしょうし。まるで、風船が、どんどんふくらんでいくように。」

その風船も、ふくらみすぎて、ぱん、ってこわれちゃったよ。

「そうか。だから、学校からぬけだして、にげようとしたのね。」

うん。もう、だれにも会いたくない。

「だれかが、のぼるくに叱るのは、のぼるくんのことをキライだからではないわよ。のぼるくんのこと、心配しているから、叱るの。」

よくわかんない。放っておいてほしい。

「のぼるくんは、こうやっているだけで、大切な存在なの。まわりの大人が叱るのは、のぼるくんのぜんぶを叱っているのではなくて、のぼるくんの行動を叱っているの。」

どうということ？

「たとえば、今回のことは、のぼるくんが、クラスメイトに手をあげたことを、先生たちは叱っているの。でも、のぼるくんすべてを、ダメな人間だ、とか、トラブルメーカーだ、とか言っているわけではないのよ。だから、のぼるくんのことキライなわけではないし、むしろ、のぼるくんにもっといい行動をふやしてほしいって、まわりの大人は叱るの。」

そんな感じはしないけど。よく、お母さんから、「なんと言わせたら、気が済むの?!」

って、よく怒られるし。

「そうね、きっと、お母さんはその時、のぼるくんがなかなか変わらないことに、もどかしかったのでしょうし、イライラしちゃったのね。もちろん、大人がどう怒っているかで、怒られた方は、傷ついたりすることはあるわよね。強い言葉や、どなり声、否定する言葉をかけられたら、それはつらいと思うの。」

そうだよ！いつも、ぼくは悪者、じゃま者あつかいなんだ。

「そう考えているのであれば、くるしいよね。でも、だからといって、イヤなもの、イヤなことから逃げていたら、ことは大きくなってしまふ、ってこと、忘れてしまった？

昨日は、忘れ物したときに、がんばって向き合ってみたよね。」

そうだった・・・自分の失敗に向き合う大切さを、昨日わかったばかりだったのに。ぼくって、なんでこうなんだろう？

「のぼるくん、自分の行動には、自分にしか責任はとれないのよ。逆にいえば、自分の行動をコントロールできるのは、自分だけだし、責任をとることができるのも、自分だけなの。だから、学校からぬけだしたことは、もう変えられないから、このことに責任をとりましよう。」

どうやって？

「学校へ戻って、ぬけだしたことをあやまるの。心配をかけたことをあやまるの。」

はあ——。やんなきゃ、ダメ？

「わたしが言っていることは、やんなきゃいけない、ということではなくて、大切なのは、のぼるくんが、自分でこうしよう、と思うこと。わたしがあやまりなさい、と言ったから、あやまったのでは、ここから、あやまっていることにはならないものね。」

でも、きりぎりすは、むかつくんだよ。いつも自分もっているものを、みんなに見せびらかしてさ。自分が金持ちって、じまんしているんだ。

「きりぎりすくんは、自分もっているもので、まわりと仲良くなろうとしているのね。それが、のぼるくんはイヤなんだ。」

そうそう。イヤミなやつなんだ。

「今回は、きりぎりすくんもっていたカードがほしくて、のぼるくんは、手がでてしまったのよね？」

そう、あのカードは、ほんとうにレアで、全然あたらないんだ。ぼくもたくさんためしているのに、まったくあたらなかったから、ほしくてほしくて、しょうがないんだよ。

「それぐらい、そのカードがほしかったのね。でも、きりぎりすくんからうばい取ろうとするのは、いい方法だった？」

ぜんぜん。先生には怒られるし、今、海の前にいるし。

「そうね。では、次からはどうすればいいと思う？もし、のぼるくんがほしいものを、だれかが持っていたら？」

ちょうだい、って言う。

「そうね、一回聞いてもいいかもしれない。でも、これはあげたくない、って言われたら？」

よこどりしたいけど、それじゃ、今回と同じになっちゃうし。

「そうね。」

どうしたら、いいんだろう？

「わたしが聞いているのは、どうやったら、手に入るか、ではないわよ。」

あ、そうか。ガマンする。

「どうやって、ガマンする？のぼるくん、ガマンするの、少し苦手なんだよね。ほしいって、思ったら、ブレーキきかなくなっちゃうんじゃない？」

うん。そう。

「ひとつのコツを教えてあげる。怒ったり、何かほしかつたり、そんなときに、自分のブレーキがきかなかつたら、そこから、立ち去ること。」

たちさる？

「そう。立ち去る、というのは、そのいる場所から、ちがう場所へ行くこと。そして、そのほしいものから、きよりを置くことよ。そこから立ち去れば、そのほしいものを見なくてすむでしょう？そうすると、そのもの自体から、きよりがうまれて、少し自分のところが落ちつくの。」

のぼるくんが強い怒りを感じたときも、この方法は、いいのよ。怒りがわーっと、ころから、体からわいてきて、だれかに手をだしたくなったり、物にあたりたくなったりしたら、そこからまずは立ち去るの。怒りの「もと」から、はなれるのよ。そうすると、すこし落ちつくから。次回、やってみて。いろいろ試してみて、のぼるくんにとって、いい対処法を見つけてみましょう。」

うん。とにかく、ほしくなったり、かーっとしたら、そこらになくなればいいんだね？

でも、そしたら、今回、ぼくが海に来たのは、よかったってこと？

「今回も、怒りが強くなったときに、学校からでて、海に来たから、わたしが言ったことと同じだと思ったのね。」

ごかいさせてしまったわね。ごめんね。わたしが言った「立ち去る」というのは、その場所からはなれて、気持ちをおちつかせる、という意味で、「いなくなる」とか、「にげる」とかいう意味ではないの。たとえば、同じたてものの中でも、ちがう部屋に行く、とか、トイレに行く、とか、自分の部屋に行く、とか、それぐらい近いきよりよ。でなければ、どこへ行ってしまったか、みんな心配するでしょう？」

のぼるは、うつむいた。

うん。

「ころがおちついた後に、なぜ、怒ってしまったのか、なぜ、そんなにそれがほしかつたのか、その人に話すことも、大切なの。ころと頭がわーっとなっているときは、どうしても、大声だしたり、手がでたり、きたない言葉をつかってしまうことが多いから。でも、少しおちついた後だったら、頭がまた、うまく回るようになるから、言いたいことを、うまく

伝えられるようになるのよ。」

そうか。逃げる、ということではなくて、一回おちつくために、そこからはなれるんだ。でも、おちついた後は、やっぱり向き合わなきゃいけないんだね。

「そうよ。」ミシャが、のぼるが理解したことをうれしそうに、ほこらしげに、ほほえんだ。

「のぼるくん！のぼるくん！」

かすかに、だれかが、また、のぼるの名前をよんでいるのが、聞こえた。

だれだろう？

「だれかが、のぼるくんを探しにきたみたいね。」

ミシャがそう言った。

のぼるは立ち上がり、その声のほうへ歩きだした。のぼるの体が、自然にそう動いたのだ。

「これから、いろんな人に、たくさん叱られるかもしれない。でも、顔をそむけないように。わたしがそばにいるから。」

うん。のぼるのこころの中は、もうしわけない気持ちでいっぱいだった。

どうして、こんなことしてしまったのだろう？

のぼるは、だれかが自分を探している声を聞いて、そう思った。

保健室の先生のすがたが見えた。

保健室の先生まで、ぼくを探してくれていたんだ。

「先生！」

のぼるは、自分がだせる一番大きな声を、おなかの中からだした。

先生は、その声で、はっと、こっちを見た。

「のぼるくん！」

先生のそれまでこわばっていた顔が、のぼるのすがたを見て、怒ったような、ほっとしたような顔に、みるみるうちに、かわっていった。

のぼるは、その顔を見て、どれだけみんなが心配していたのか、わかった。

先生は、のぼるに近よってきて、

「はあ、よかった。」と言って、のぼるのあたまを、くしゃくしゃと、なでた。

のぼるは、先生の手のあるかさを感じた。

先生の息がきれている。きっと、たくさん歩いて、走って、探しまわってくれたんだ。

そう思ったら、すこしのぼるはうれしかった。

「とにかく、まずは、他の先生たちに、のぼるくんが見つかったことを知らせるわね。」

そう言って、先生は携帯電話をとりだし、学校（だと思ふ）に電話をかけた。

「・・・はい。・・・そうです、見つかりました。・・・海岸にいました。・・・はい。・・・では、いっしょに戻ります。」

先生は電話をきって、のぼるの方を向いた。

「のぼるくん、みんな心配したのよ。話を聞きたいけれど、今は、とにかく、学校へもどりましょう。」

のぼると保健室の先生は、学校へむかって、いっしょに歩きはじめた。さっき、ひとりで歩いていたときより、ふしぎと、足はかるかった。

さっき、あんなに歩いてつかれたのに。なんで、今のほうが、歩きやすいんだろう？しかも、これから、たくさん怒られるのに。

「のぼるくん、すこし、先生の顔を見て、安心した？」

ミシャが、そう聞いていた。

うん、正直、先生の顔を見て、ほっとした。

「だから、今のほうが、足がかるく感じられるのよ。こころと身体は、おもしろいぐらい、つながっているからね。海に行くときは、緊張や不安、怒りをたくさん感じていたから、からだも緊張していたし、からだ緊張して、ガチガチになっていると、うごかしにくくなるから。」

そうか。

でも、怒られるのはイヤだな。何を言われるんだろう？みんな、すごい大声をだすんだろうな。

「これから叱られるのがわかっていて、そこへ向かうのは、緊張するし、不安になるわよね。こわいだろうし。でも、みんな、のぼるくんのことを想っているからこそ、叱るのだ、ということはおぼえていてね。」

学校へ向かう一歩一歩ふみだすたび、のぼるは、

「大丈夫」

「大丈夫」

と、じゅもんをかけるように、こころの中で、自分に言い聞かせた。

やがて、学校の門が見えてきた。

「さあ、のぼるくん、あともう少し。一緒に校長室に行きましょう。」

校長室？校長先生に会うのか。

のぼるは、まえにも校長先生とは何回か会ったことがあった。なにか大きなトラブルを起こしたとき、それは今日みたいにだれかとケンカしたときや、うそをついたときに、校長先生と会うことになる。でも、校長先生は、のぼるに大声をだしたことはなかった。ただ、なにが起きたのか、のぼるの話を聴いてくれる。そして、おだやかな声で、

「のぼるくんの話はわかった。でも、だれかをたたいてはいけないね。」

と、言うのだ。そのおだやかな声のほうが、のぼるのこころには、印象にのこった。大声で

怒られたりするより、よっぽど、自分のところにさきつた。

校長室には、校長先生と担任の先生がいた。その横には、お母さんもいる！

「のぼる！」お母さんが、のぼるを見るなり、かけよってきた。

「のぼる、なんでこんなことしたの？」

強い口調で、お母さんは、のぼるをなじった。

のぼるは、お母さんの顔を見たら、なにかが一気にきれた感じがして、

「わーん！」と、声を上げて、泣いた。のぼるは、5年生にもなって、みんなの前では泣きたくなかったけれど、どうしても、とめられなかった。

泣きじゃくっているのぼるを見て、お母さんも、校長先生も、担任の先生も、なにも言わなかった。

その日は、けっきょく、なにも話さないまま、校長室をでて、お母さんと一緒に家に帰ってきた。お母さんは、先生たちに、ぺこぺこ、いっぱいおじきをして、帰ってきた。

家に帰るときも、お母さんものぼるも、一言も話さなかった。そのときには、のぼるのみだは、とまっていた。

きまずいな。けっきょく、なにも言えなかった。どうして、泣いちゃったんだろう？

そんなことを繰り返し、のぼるは考えていた。

ミシャも何も言わなかった。

家について、お母さんは、

「今日は、おふろにはいって、ごはん食べて、すぐねなさい。」

それしか言わなかった。

お母さんの顔は、こわばったままだった。怒っても、叱ってもこないお母さんが、ぎゃくにこわく感じた。

のぼるは、とりあえず、お母さんが言うとおりにした。のろのろと、おふろの支度をして、お風呂に入り、すでにできあがっていたごはんを、のろのろと食べ、のろのろと、ふとんの中に入った。

ミシャ、どうして、お母さんはなんにも言ってくれないんだろう？

「どうしてだと思う？」

わからないから、聞いているんだよ。

「のぼるくん、これは大切なことだから、いっしょに考えてみよう。」

なぜ、お母さんは、まったく叱らなかったのか？ どうしてだと思う？」

お母さん、ほとんど口もきいてくれなかった。ぼくが泣いてしまったからかな？

「泣くことは、けっして、わるいことではないよ。泣くことで、こころはきれいに浄化されるから。怒りや悲しみが、なみだと共に、からだの外にでていくの。だから、泣いたあとは、気持ちがすっきりしていることが多いでしょう？

でも、もしかしたら、のぼるくんが泣いたことで、お母さんは何か考えたのかもしれないわね。」

何か？

「うん。のぼるくんのなみだを見ていたら、ただ怒るだけでは、意味がない、と気がついたのかもしれない。お母さん、どうしたらいいか、わからなかったのかもしれないわね。のぼるくんは、どうして泣いたのだと思う？」

なんか、とつぜん、なみだがでてきたんだ。理由なんてないよ。

「そうね、自然に、なみだはでるからね。それは大切なことね。では、なみだがでてきたとき、のぼるくんは、どんなことを考えていた？」

何、考えていたんだろう、ぼく。あんまりおぼえていないけど、お母さんの顔をみたら、なんか「ぶちっ」と、なにかがきれた感じがした。

「そうか。もしかしたら、お母さんの顔をみて、すごく安心したのかもしれないわね。それまでの緊張の糸がきれたのかもしれない。」

そうそう。そんな感じだった。ぴんっと、はっていたものが、ぶちって、きれた感じ。

「それぐらい、のぼるくんは、緊張していた、ってことよ。」

そうか。わかんなかったけれど、すごく緊張していたんだ。

そう思ったら、なんだか、泥ぬまにまるでしずんでいくように、からだの中がおもくておもくてしょうがなくなってきた。

「つかれがでてきたみたいね。たくさん歩いたから、からだもつかれているでしょうし、たくさんの感情がでたから、こころもつかれたかもしれない。とにかく、今日は、ゆっくり寝ましょう。」

その声を聞きながら、のぼるは数秒もたたないうちに、寝息をたてていた。

「・・・そう、のぼるがね、・・・わたし、もう、どうしたらいいかわからない・・・そうやって、いつもわたしにおしつけるのね・・・」